

夢っくすニュース

No.4
2003年3月15日

UMEX NEWS **UMEX NEWS** UMEX NEWS



夢っくす 誕生から1年

うおぬま国際交流協会
会長代行 井口 義夫

2002年5月26日のうおぬま国際交流協会（UMEX「夢っくす」）設立から、まもなく1年がたちます。現在、会員数は120名を超えました。人間で言えば、1歳の誕生日を前にして、ようやくつかまり立ちができるようになったところでしょうか。

夢っくすは、魚沼地区の国際化と異文化の正しい理解を促し、多文化共生社会へ向けた魅力ある開かれた地域の創造に貢献するとともに、連帯と協調のもと、地球社会の発展と平和の実現に寄与することを目的としています。

大和町には海外からの留学生が学生全体の約8割を占める国際大学があります。すべての授業を英語で行う大学院大学で、学内の施設も大変充実しており、恵まれた環境のキャンパス内で留学生活が完結できてしまいます。ごくわずかに、留学生に地域の英会話教室の講師を依頼し、それをきっかけに個人レベルで付き合いが続いている例などがありましたが、多くの学生はこれまで地域とほとんどかかわることなく日本を去っていくのが常でした。

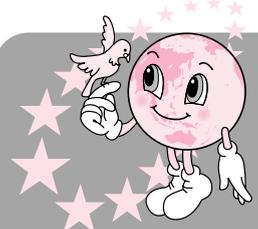
しかし、潜在的には、「せっかく日本へきたのだから、日本の社会や文化にも触れてみたい」「キャンパス外で、日本人と日本語で会話できたらいいな」と思っている留学生と、

「海外のことに興味がある」「視野を広げたい」「田舎にいながらにして、外国人と交流できたら楽しいかも・・・」と考える地域住民の思いがありました。この二者の橋渡しを始めたのが「夢っくす」なのです。

この1年近くの活動を通して、夢っくす主催のイベントには毎回多くの留学生が参加するなど、国際大学内での夢っくすの認知度はかなり定着してきました。ホームページを見て、会員登録をする地域住民も増えています。夢っくすでは、「国際交流は英語ができない人には無理」という頑固な思い込みを捨ててほしいと思います。

さらにこれからは、積極的に日本語交流員の育成を図り、地域住民と留学生、さらには、国際結婚や仕事の関係で魚沼地区に住んでいる外国人をも含めた、多文化共生の架け橋として、社会に貢献していきたいと考えています。

夢っくす紹介



うおぬま国際交流協会（UONUMA Association for Multicultural Exchange：通称UMEX「夢っくす」）は、魚沼地域の国際化と地域住民の異文化理解を促進し、多文化共生社会へ向けた開かれた魅力ある地域づくりを目指し、2002年2月に活動を開始、5月26日に正式発足しました。

夢っくすの特徴は、留学生交流を地域づくりへと発展させることを構想し、設立の段階から地域と大学、そして大和町が協力連携していることです。2003年3月1日現在の会員数は、南魚沼と北魚沼を中心とした2市8町3村の住民126名で構成されています。

トピック

- 1面 夢っくす誕生から1年.....うおぬま国際交流協会会長代行 井口義夫
- 2・3面 夢っくす活動紹介
「外国人住民と地域活動」シンポジウム参加報告.....大平悦子
- 4面 母国紹介シリーズ 翻訳プロジェクト
- 5面 北魚沼郡日本語交流教室を開始して2ヶ月.....NPOシーター代表 今井忠篤
ホストマザー体験記.....牛木久美子
- 6面 「水の星の小さな町の一つの実験」.....国際大学教授 渡辺慎一
- 7面 「肩の力を抜いて国際交流」.....浦佐小学校校長 岡村 勝
- 8面 活動予定 入会案内

夢っくす活動の振り返り

～ 試行錯誤の1年～



夢っくすの正式発足からまもなく1年。ゼロからの組織づくりと平行して取り組んだ活動は正に試行錯誤の連続でした。失敗の中から学び、そして活動に参加した会員、学生そして外国人住民との対話の中からようやく見えてきたものは、日本人と外国人という区別をこえて、共にこの地に暮らす住人として、共に学び合える関係性の樹立が大切ではないかということです。

日本語交流を中心としたサロン活動と日本語および英語プログラムの提供、双方向の学びを目的とした母国紹介や日本の伝統文化紹介シリーズの充実、そして異文化理解講座の企画を活動の中心に据えて、折々に交流プログラムを組み込んだ活動をしてきました。

日本文化教室

1回完結型でコンパクトに日本文化のエッセンスを伝えようという企画です。

定番になりつつある華道教室と茶道教室に加えて3月には書道教室が加わり、文化教室のバリエーションが広がりました。夢っくすでは生け花や茶道、絵手紙、墨絵、習字、お料理など「私はこういうことができる、あるいは協力できる」という方の会員リスト(名づけて達人リスト)を作成しています。登録は随時受け付けております。ご連絡ください。

"I was very much happy to be part of the flower arrangement session. In fact it was my first time dealing with flowers! The best out of all this is that I tried something new, and the experience was great".
Mr. Fernando from Ecuador



日本の伝統文化紹介

夢っくす活動を通じて留学生や外国人と接する機会を持った会員の多くは、「日本についての知識の曖昧さ」に気づいたと言います。「日本」に限らず、地元魚沼の習慣や祭りの謂れや起源について、語ることができるでしょうか。

「まず日本人が、日本を知ること。それが国際交流の第一歩です」は、公共広告機構のキャッチコピーですが、言いえて妙です。

このシリーズでは、参加した留学生や外国人以上に、「へえー知らなかった」と質問を連発するのは日本人参加者だったりします。これまでに、「節分」と「裸押し合い祭り」を取り上げました。

Dear Sakurai-san,

Thank you very much for your presentation for Setsubun festival. Now I understand more why they have to eat bean as equal as their age. Also, this is my first time to know that Setsubun festival day is the same day as Chinese new year (if I'm not wrong). I hope to hear more about Japanese

festival (especially Japanese culture!) next time...

Mata kondo mo yoroshiku onegaishimasu! Arigatou

Gosaimashita

Aek



言葉の壁はあるけど...

夢っくすの特徴であり活動を展開する上での課題は「言葉の壁」をどう乗り越えるかです。日本の大学で学ぶ留学生のほとんどは日本語学校で日本語を勉強してから入学しますが、国際大学の留学生は海外から直接入学するため、日本語の話せない学生がほとんどです。

そこで、夢っくすでは、「日本語は話せないけど日本人の友人が欲しい」という留学生と、「英語は苦手だけど外国の人と交流したい」という会員向けに、日本語と英語を学ぶ機会を提供しています。会員からは「韓国語講座も開いて欲しい」などの要望が寄せられており、体制を整えつつ、多様な言語学習の機会を提供していきたいと思います。

<英会話教室>

昨年7月中旬から9月初旬にかけて、会員の英語教師・武藤崇子さんと国際大学学生のピクトリアさんの協力を得て、トライアル英会話教室を開催しました。トライアル教室参加者からの継続希望と会員の英会話学習の希望が高いことから、英会話教室を定期的で開催することになりました。

CD付きテキスト『New Interchange』を共通テキストとし、10月～12月にかけて第2期、1月下旬から3月にかけて第3期英会話教室を開催しました。講師には、武藤さんに加えて、大平智子さん、トレーシーさん、ジェフ君、マーク君が加わりました。



「外国人住民

文京区主催
シンポジウム
参加報告

と 地域活動」

「先日のシンポジウムに参加して」

大平悦子

今回のシンポジウムで何人かのお話を聴いて、共通していた点でもあり、印象に残ったことでもあるのは、ある区域の中に住んでいる人は、日本人、外国人といった線引きをする以前に、等しく地域住民であるという認識です。

ただ「文化の違い」があるのは当然のことです。日本人の間ですら、好んで聴く音楽や食べ物の嗜好をはじめ、考え方も多様化している時代です。だから、個人個人の文化は最大限尊重する。しかし、必要に応じて率直に議論もするという姿勢が大切です。そのように同じ地域住民としての外国人と接することにより、日本を見直すよい機会になると思います。

また、外国人住民は、必ずしもいつも誰かに助けられる存在であるというの、おかしな思い込みだということにも気づきました。外国人住民にも持っている能力を発揮し、活躍できる場が必要だということです。

私たち UMEX は、幸いにも、優れた能力を持ち、50ヶ国を超える国々から毎年 100 名以上の留学生がやってくる国際大学との結びつきが中心となっています。彼らも地域住民の一員として、もっと地域活動に参加する機会があっていいのです。現在企画中の、4月12日開催予定、インドネシア人留学生たちによる母国紹介「ガルーダプロジェクト」が、その手始めになることと思います。

最後に、UMEXでも、新しく、外国人とUMEX会員が対面で日本語で交流するチュータープログラムが動き出しましたが、東京大学留学生センターで、1997年から実践されているFACEプログラムが、まさに、UMEXでもこんなふうに進めていきたいと思っている形で、大変参考になります。FACEプログラムのガイドブックをぜひUMEX会員の皆さんにも目を通して頂きたいと思います。

会員継続

アンケートから

平成14年度の会員登録期間が3月末で終了するため、現在会員継続手続きをお願いしています。その中で会員の皆さんから来年度も継続を希望する事業を3つ挙げてもらいました。記載のない方も多いのですが、回答が多かった上位3つのイベントは、母国紹介、日本文化紹介を含む異文化理解講座(16)、英会話・日本語プログラム関係(12)、バスツアーや新入生歓迎会などの交流会(8)でした。この結果から、留学生と実際に交流する事業の企画、語学学習への支援、異文化理解を目的とした事業の企画が会員に期待されていることが読み取れます。

<日本語プログラム>

昨年3月から4月にかけて31名の会員が「日本語の教え方講座・短期実践講座」の受講を開始しました。国際大学が夏休みに入った7月に入ると一部受講者から「教育実習をやってみよう」という声があがり、夏休みにキャンパスに残った留学生とその家族の方々15名を対象に初級日本語教室を開講しました。

10月から開始した第2期日本語教室には、12名の日本語交流員と24名の受講者が登録しました。受講者が回を重ねるごとに上達していく実感が、交流員に達成感と自信を与えてくれたように思います。「受講者から学ぶことも多い」プログラムです。

1月下旬からは第3期日本語教室に加えて、受講者の多様なレベルに応えるためチュータープログラムを開始しました。受講者の中には2名の国際大学の外国人教員も加わり、また、地域に暮らす外国人花嫁さんがサロンを訪れるなど日本語交流の輪が広がっています。



交流プログラム

「夢っくすには身体を動かし、心を動かす交流を期待しています。」これは前国際大学学長島野卓爾先生からのメッセージです。言葉のコミュニケーションギャップは一緒に活動する体験型イベントでは容易に克服できます。体験型イベントでの出会いから会話パートナーへ発展したり、田植えのお手伝いに伺ったり、自宅にご招待いただいたりと個人的な交流へと発展するケースが見られます。

これまでに、バスツアー(3月村上人形様祭り、11月日光)、国際大学日本人学生の企画に協力したジャパニーズ・ナイト、新入生歓迎バーベキュー、稲刈り体験ツアー、手巻き寿司パーティーなどを行ってきました。企画の多くはサロンでの会話の中から実現しました。

ホームステイ/ホームビジット・プログラムは、会員からの「受入連絡票」を事務局宛お送りいただき、サロン内に掲示して参加希望者を募集するというシステムで運営しています。家族単位の国際交流を始めてみませんか。皆さまの「受入連絡票」をお待ちしております。



母国紹介 シリーズ

留学生が日本人に伝えたい自分の国のトピックについて発表し、参加者の質問に答えるシリーズです。「リオのカーニバルだけじゃないブラジルの多様な祭りについて」、「ガーナと日本の子育て」、「両親の来世のためにする出家(タイ)」、「ワールドカップサッカーを楽しむための韓国紹介」等テーマはさまざまです。ニュースや事件報道に偏りがちな国々の素顔を知ることのできる楽しいシリーズです。

これまでに取り上げた国々はルーマニア、ウズベキスタン、シンガポール、カナダ、韓国、カンボジア、ギリシャ、ガーナ、ブラジル、タイの10ヶ国です。



翻訳 プロジェクト



町役場から届く文書や、病院での問診票が読めない人たちは、行政サービスの機会を逸する、あるいは、病院で意思疎通が上手くできない場合は、命にかかわることも想定されます。こうした事態を改善することが、多文化共生社会の基盤整備の第一歩と、夢っくすでは行政・病院文書の翻訳(6月)、小学校の通知表の翻訳(11月)に取り組んできました。

しかしながら、翻訳をお届けした大和町役場や大和町病院では、「英文の資料があると英語が分かると思われるので・・・」と、実際の活用はこれからの課題です。

広がる外部団体とのネットワーク

会員も運営委員も含めてほとんどが国際交流協会でも活動した経験がなく、誕生間もない夢っくすをどのように運営したらよいのか、どのように活動を組み立てていったらよいのかと分からないことだらけでした。しかし、「大学と地域との連携」がさまざまレベルでテーマになっていたことが幸いし、アルク『月刊日本語』(11月号)、進研アド『Between』(11月号)、ぎょうせい『留学交流』(12月号)で夢っくすを紹介する機会に恵まれさまざまな方々から助言をいただくことができました。また、2月には東京大学関連社会学研究室(丸山真人教授・中西徹教授)の「大和町の暮らしとまちづくりに関する学術調査」の最終報告会でも夢っくすが取り上げられ今後も情報交換をしていくことになりました。

大和町ホームページや(財)新潟県国際交流協会ホームページの「県内国際交流・協力団体情報」のページに夢っくすを掲載していただき、ホームページにアクセスして入会する会員も徐々に増えています。夢っくすからの情報提供を強化しつつ他団体とのネットワークの拡大を図っていききたいと思います。

夢っくす日誌

(2002年10月～
2003年3月)

- 10月12日 研修「国際理解教育って何？
- そのねらいと実践への基本課題」講師：山西優二
- 10月16日 第2期英会話教室開講
- 10月18日 母国紹介10(ブラジル)
- 10月25日 華道教室
- 10月26日 研修「日本語教育セミナー in
上越」講師：足立祐子
- 10月31日 第8回運営委員会
- 11月1日 研修「学校における日本語学習
支援活動」
講師：河北祐子・宮崎妙子
- 11月2日 研修「ボランティア活動の基礎
参加と学び、そして共感」
講師：杉澤経子
- 11月3日 世界文化遺産・日光を訪ねる
バスツアー
- 11月8日 母国紹介11(タイ)
- 11月23日 ユネスコ代表団歓迎会、
ホームステイ(25日まで)
- 11月24日 ユネスコ代表団向け日本文化講座
- 11月26日 茶道教室
- 11月28日 9回運営委員会
- 12月7日 「日本語の教え方・短期実践講座」
3期生9名が受講開始
- 12月13日 研修「日本語学習支援と地域
ネットワーク」
講師：河北祐子・宮崎妙子
- 12月14日 手巻き寿司パーティー
- 12月15日 ホームページ研修会1
- 12月22日 ホームページ研修会2

2003年

- 1月10日 交換留学生の歓迎会
- 1月25日 第10回運営委員会
- 1月29日 第3期英会話教室開講
- 1月31日 伝統文化紹介「節分」
講師：桜井稀一郎
- 2月1日 研修「外国人住民と地域活動」
基調講演：宮島喬他
- 2月8日 研修「学校と地域の連携に
ついて」講師：山西優二
- 2月22日 研修「NPOマネジメント」1
講師：川北秀人
- 2月23日 研修「NPOマネジメント」2
講師：川北秀人
- 2月28日 伝統文化紹介「裸押し合い祭り」
講師：井口義夫
- 3月1日 研修「NPOマネジメント」3
講師：渡邊信子
- 3月2日 第10回運営委員会
- 3月9日 研修「NPOマネジメント」4
講師：川北秀人

* 夢っくすニュース第3号
(2002年10月1日発行)のご入用の方は
事務局までご連絡ください。

北魚沼郡日本語交流教室を 開始して2ヶ月

NPOシーター 今井忠篤

NPOシーターは広神村から六日町を活動範囲としています。今年1月から北魚沼郡町村教育委員会協議会と共催で「北魚沼郡日本語交流教室」を開き2ヶ月が経過しました。4月からは本格的に展開すべく会員全員が毎日曜日会場に出かけています。

北魚沼郡7町村内には54名8ヶ国からお嫁さんが来ています。全員に案内を出しましたが、現在5ヶ国13人が参加しています。地域が広がっていますので、守門村会場、広神村会場、小出町会場、川口町会場の4会場を開設しました。年4回位合同教室（日本の家庭料理・病人食・里山散策・講演会等）も計画しています。

2ヶ月間でのべ8教室21名の参加がありましたが、ほとんどの方が子育て中で子どもも参加しています。それに1人での出席は少なく夫も参加していますので実数は60人を出ています。母が妻が家庭のことを地域社会のことを習慣の違いのことを学習している姿を父子が見ることも大変よいことだと思えます。

会員は経験も豊かで研究心も旺盛で1対1から1対3でランクをつけて指導しています。

はじめは一斉に共通の学習（あいさつ・自分や家族の紹介・電話の受け方かけ方等）個別では台所用品や野菜の名称から自動車運転教本の読み方まで千差万別です。しかし、回を重ねるごとに明るくなり笑顔みせるようになりました。又、習慣の違い価値観の違い等から出てくる悩みも相談をもちかけるようになりました。



ホストマザー 体験記

牛木久美子

「ただいま～今日のご飯はなに？ラーメンか～！」帰国を1ヶ月後に控えたヒカルドの一声。全く我が子の様だ、あきれんやら、よくぞ日本語をここまで、と感動するやら、初めて会った日から今までの日々をあらためて振り返ってみました。

雪がまだ残る去年の3月、新幹線の下りホームで出会えたあの日、コミュニケーションはもっぱらジェスチャー、多情多感な17才の高校生に貴重な体験をと、あせれば、あせるほど、空回りしてしまう。せめて食だけは充実せねばと、料理の本を借りて頑張ったものの彼どころか、家族にもうけませんでした。

桜の花も散ったころには、すっかり困ってしまい、外国人の生活を知っている知人と、ヒカルドと私で話し合い、とりあえず4つの事について互いに確認しました。

- 1・水道水は飲みたくない（ヒカルド）
- 2・部屋の掃除はしないでね、自分でやる。（ヒカルド）
- 3・牛肉は食べない（私）
- 4・特別な女の子はつくらない事（私）

たった4つの問題点だったのに、秋のころには私の方がいっぱいになってしまい、ついには、大喧嘩。「もういやだ」その時、私を支えて、最後まで導いてくれたのは家族であり、周囲の方々でした。

大変お世話になりました。

今年に入ると方々でお別れの会がありました。ある会でのヒカルドの一言。「もういやだ！もう駄目だと思っていた日、あなた達は私を助けてくれた。廊下で笑ってくれた友達、挨拶してくれた友達、助けてくれて本当にありがとう」など。お世話になった方々にありがとうと何度も云っていました。ヒカルドも苦しい時がいっぱいあったんだ。

帰国から1ヶ月たち今は楽しかった事ばかりが思い出されます。彼は学校生活以外にも和太鼓、サッカー、パレーボール、柔道、ギター、ドラムなど、いろいろな事に頑張り、たくさんの人々の笑顔に支えられました。本当に有難うございました。

最後に、彼の残していたノートにあった名言より「お母さんは女の子が嫌いです、ですから、家に持って（連れてきちゃ）帰ってはいけません」

ああ、我が子よ、ごめんネ。



ヒカルド君はAFS（American Field Service）年間留学生として牛木さん宅で1年間過ごしました。AFSはニューヨークに国際本部を置き、世界各国で高校生や教師の交換留学などさまざまな異文化交流を実施している国際的な民間団体です。AFS新潟県長岡支部が新潟県にくる留学生のホストファミリーやLP（Liaison Person: 担当者）を決めています。

ヒカルド君に続き、3月にはノルウェーの高校生が大和町にやってきます。LPは夢っくす会員が担当することになりましたので、ヒカルド君同様、夢っくすとしてもバックアップしたいと思います。

水の星の小さな町のひとつの実験



国際大学教授 渡辺慎一

「水の星」

茨木のり子の「よりかからず」という詩集の中に「水の星」という詩がある。彼女はその中で地球を「宇宙の漆黒の闇の中を ひっそり廻る水の星」と呼んだ。そして、「生まれてこのかた なにに一番驚いたかと言えば 水一滴もこぼさずに廻る地球を 外からパチリと写した一枚の写真 こういうところに棲んでいましたか これを見なかった昔のひとつは 線引きできるほどの意識の差が出てくる筈なのに みんなわりあいぼんやりとしている」と宇宙に浮かぶ地球の姿とそこに棲む我々の姿を描いている。

この水の星のアフリカの辺りで徐々に進化していった人類が、数十万年かけて水の星のあちらこちらに散らばり、散らばった先のさまざまな環境に適応して独自の身体的な特徴や言語や文化や社会、また、政治や経済の仕組みを発展させてきた。もちろん、独自の仕方でも発展してきたそれらのかけがえのない文化や社会は孤立していたわけではなく、たったひとつの水の星の上で、いろいろな仕方でも互いに影響を与え合ってきた。

「水の星」で共に生きる

その多様な文化や社会が、ここ数十年、かつてなかったような規模と仕方でも相互作用を起こし、ニュースやら身の回りの出来事を通して、「わりとぼんやりしている」我々でも、ひとつの水の星で共に生きるということの意味について、共に生きるその仕方について、あれこれ考え直してみる必要がありそうだなと思う機会がめっきり増えてきた。

富んだ国と貧しい国があり、どちらにも富んだ人々と貧しい人々がいる。食べ過ぎて困っている人と、食べ物がなくて困っている人がある。爆撃や地雷で死んでしまう子供もいれば、退屈まじりにコンピュータの戦争ゲームに興じている子供もいる。メーテルリンクの「青い鳥」にこれから生まれてくる赤ちゃんの国がある。その赤ちゃんは、だれもがどんな両親のもとに生まれ、どのような暮らしをして、どれだけ生きられるかを知っている。メーテルリンクの赤ちゃんの国では、近年、どれだけ赤ちゃんが生まれるのを楽しみにしているだろうか。あまりにも大勢の赤ちゃんが生まれるのを嫌がって困っているのではないだろうか。

国際開発プログラムの目指すもの

僕が働いている国際開発プログラムの一番大事な課題は、貧しい国が抱えているさまざまな問題を、それらの国から来た学生と共に考え、その解決策を探ることである。もちろん貧しさがすべてというわけではないが、貧しさゆえに避けて通ることのできない多くの問題が存在し、しかもどの問題をとってもどのようにしたら最も効果的にその問題を解くことができるのか、ただひとつの正解があるわけではない。そういう状況では、唯一の正解が存在するという信仰は、むしろ一般的に知られた解決策への過度な依存を生み、問題の全体像を明らかにし、その解決策を発見するためのさまざまな試みをつぶしてしまう。

アジア危機で、IMFが果たした役割はそのようなものであった。時にワシントン・コンセンサスと呼ばれる解決策に対するIMFの過信が、アジア危機の全体像を見誤らせ、より有効な解決策を発見するための試みを押し流してしまった。

国際開発プログラムが目指しているのは、学生が途上国のひとつひとつが直面している問題の多面性、多元性、歴史性

を評価し、それに見合った解決策を探ることができるような力を身に付けることを助けることである。そのために、最も役立っているのは、ひとつのキャンパスに40近い国から学生が集い、共に学んでいるという事実であろう。学生のそれぞれが異なった文化や価値観をもっているという事実は、問題の多面性を発見するのに役に立つ。問題の多面性を認識することは、より有効な解決策を発見するのに役立つ。僕を含めたプログラムの教員が常に心を砕いているのは、どのような学習と研究の場を作ったら学生がお互いからより多くを学べることができるかという問題である。

大和町で学ぶことの意味

もちろん、この問題にも唯一の正解があるわけではない。しかし、どのようにしたらより良い学習と研究の場を作り上げることができるか、さまざまな実験をカリキュラムの上で試してきた。カリキュラムはプログラムの核であり、少しもゆるがせにできない。しかし、国際開発プログラムが作り上げてきたカリキュラムは、まだ、いくつかの重要な点で極めて不十分である。

40近い国から学生を集め、共に学び研究する場を作ることだけであるなら、アメリカやイギリスでも類似したプログラムを作ることは十分可能であり、代替可能であり、恐らく、ある意味で国際大学の国際開発プログラムより優れたプログラムがすでに存在する。それにもかかわらず、もし国際大学の国際開発プログラムにその存在意味があるとしたら、アメリカやイギリスの大学に真似ができないくらい、その学習と研究の場を、途上国の直面する問題の多面性、多元性、歴史性を不断に考え、思い起こし、それに見合った解決策を発見するのに有効な場にしたときであろう。

そのようなことができるだろうか。わからない。しかし、ひとつだけ可能性はある、と思う。それは、学習と研究の場が、日本にあるという事実、また、日本の中でも、東京や京都や大阪ではなく、新潟にあり、魚沼にあり、大和町にあるという事実を、十分にプログラムの中に取り入れることができたときである、そう思う。

「夢っくす」への期待

それでは、どうしたら、それが可能か。わからない。いろいろ試してみるよりない。例えば、教材を作る場合、日本というレベルですらなかなか骨が折れる。学生が日本語を読めないためである。地域に根ざした教材となればより難しい。「夢っくす」のような仕組みも、学生がその視野を広げ、経済発展の多面性や多元性を考えることを助けるに違いない。学生が地域と接点を持ち、地域の問題を、自分の国の問題との関連で考えることができれば、更に良い。もし「夢っくす」を通して、学生が地域の小学校や中学校の社会科や地理や歴史の教材作りに貢献できたら素晴らしいと思う。日本語という社会環境の中で英語によるプログラムを運営していくという事実を国際大学の強みに転化できたとき、国際大学はアメリカやイギリスの大学では代替することのできない、日本が世界に提供する素晴らしい国際公共財になることができる。そのためには、大学と地域の連携のさまざまな試みを蓄積していくことがなによりも重要である。「夢っくす」の実験とその経験は国際大学の将来にとって極めて貴重な資産になる。

国際大学（International University of Japan、略称IUJ）は、1982年に国際社会に貢献するために必要な専門的かつ実践的な知識と異文化適応能力をもった人材育成を目的に設立されました。大学院大学という設置形態、教育言語を英語としたこと、留学生を広く世界各国から受け入れる政策をとったこと、全寮制を前提としたこと、9月入学制など、いずれも当時は日本では初めての試みでした。

紹介

国際大学

IUJには国際関係学研究科（2年制の国際関係プログラムと国際開発プログラム）と国際経営学研究科（2年制のMBAプログラムと1年制のEビジネス経営学プログラム）の2つの研究科があり、300名弱の学生が学んでいます。学生の8割を世界50カ国からの留学生が占めていることが、ユニークな学習・研究環境を提供しています。

肩の力を抜いて... 国際交流

大和町立浦佐小学校長 岡村 勝

私は大和町生まれですから、本当によくわかるのですが、国際大学ができるまでこの地域で外国の人を見るなんてことは殆ど皆無に近かったのです。それが今では町のコンビニで出会ったり、時には八海山の登山道で会ったりするのですから、実に様変わりしたものです。

浦佐小学校の帰国・外国籍児童数の推移は下の表の通りです。ここ二・三年急激に増加しているのが分かります。これを全国的に見た場合、例えば群馬県の大泉町の小学校では平成十年に、百二十人を記録しています。これは、全校児童の17.8%に当たります。この町の場合は工場で働く南米系労働者の子供たちです。この傾向は工場の多い市や町で多く見られるようになってきました。浦佐小学校では学生の子供たちが多くなってきたことと、国籍が多様化してきたことが特徴として挙げられます。

今でこそ、学校に外国籍の子がそこにも、何の不思議もない学校になっていますが、はじめて受け入れた頃はいろいろとトラブルもあったようです。記録をたどってみると、習慣や文化の違いによるものが多かったようです。たとえば、女の子のピアスが問題になったり、意思表示をはっきりいうために喧嘩になったとか、ストレスがたまって暴力的になったりとかです。

「言葉のちがひ」、これは確かにあるに違いありません。でも、日常会話なら子供たちはすぐ使えるようになります。年齢が低ければ低いほど早いようです。（忘れるのも早いようです）。「習慣の違い」、これも実は、意外に早く慣れてしまいます。大変なのは文字言語の面で、「読む・書く」という分野です。低学年の時に来た子供は日本の子供たちと、さほど大きな開きはないのです。ところが高学年になると「読む・書く」で大変苦労をします。

これは考えてみれば当然のことなのですね。私も英会話を習い始めたのですが、ほんとに駄目ですね。六十の

手習いは身に付きません。

外国籍の子供たちの指導に当たる時、注意していることが幾つかあります。一つは文化の違いを慎重に扱うということです。例えばムスリムの子供たちへの食べ物の問題や「ラマダン」期間の対応などがあります。これは宗教上のことですからいい加減な気持ちで対応してはいけないと思います。

二つ目は日本語指導です。これは、国際大学生の子供たちと国際結婚、帰国児童の場合と少し違う観点で指導していく必要があります。なぜかということ、日本に永住する子供たちにとっては「学習」するための日本語を基礎から時間をかけてきちんと指導しなければいけないと考えるからです。そうしないと中学校、高校、あるいは大学で「学ぶ」ことに支障が出るから考えるからです。

三つ目は、学生の子供たちに日本の文化にいろいろと触れさせたいということで、さまざまな機会に日本の遊びや行事に参加させたり、学校で仕組んだりして実施しています。しかし、このことはまた日本の子供たちにとってもまた大変貴重な体験ともなるのです。言い換えると、それは日本と外国の子供たちの「双方向」で学ぶということになります。例えば、昨年十二月、マレーシアの子供たちが全校集会で「日本とマレーシアの学校の違い」について発表してくれました。日本の学校では答えが合っているとき をつけるが、マレーシアでは✓をつけるとか、給食がなくて食堂でお金を払って食べるとかですね。一番日本の子供たちが驚いたのは、マレーシアの学校は宿題を忘れて廊下を走ったりすると先生に棒でたたかれるというようなことです。

かつては、いろいろと問題の多かった、外国籍の子供たちの受け入れですが、今、地域の方々の理解や協力のおかげですぐいぶん変わってきていると思います。児童数が急激に増えたこの二、三年とタイミングを合わせたように設立されたうおぬま国際交流協会の存在もまた大きい事であったと感謝しています。

今後のみなさんの活動が、「普段着の国際交流」としてますます交流が深まり、その成果が魚沼から発信できるよう期待しています。

帰国・外国籍児童数の推移（最近の9年間）（網かけは要日本語指導）

年度	帰国児童	インドネシア	カナダ	韓国	アメリカ	モンゴル	エジプト	マレーシア	中国	スリランカ	フィリピン	ウズベキスタン	のべ計
平成6	4 (2)		2		3								9
7	4 (1)		1		2								7
8	6 (1)	1	1		3								11
9	4	2	1	1	3								11
10	3		1				1						5
11	2		1		1	2	1						7
12	1	3	1		2	5		1	1				14
13	1	3	1	2	2	2		15	1				27
14	0			1	2			16	1	2	1	2	25



活・動・予・定

夢っくすの詳細な活動予定と参加方法は、会員向けに発行される月刊「かわら版」で紹介しています。夢っくす活動にご興味のある方は、まず、ご入会ください。

1 「金沢バスツアー」

夢っくす会員との交流を目的にした加賀 100 万石の歴史探訪ツアーを企画しました。現地での見学は3グループに分かれて行動しますので、日頃の英会話と日本語学習の成果を試してみましょう。

3月29日(土) 国際大学を午前6時半に出発、帰宅は午後7時半頃の予定
行き先：金沢(兼六園・忍者屋敷・近江町市場など)
参加費：大人 3,500 円 子供 2,500 円(12歳以下)
定員：55名(内訳...夢っくす会員 17名・学生 38名)

2 「国際理解講座・インドネシア編」

4月12日(土)、午前9時半～午後5時、於：大和町・働く婦人の家、参加費 1,000 円(昼食代・資料代)

国際大学の学生たちと夢っくすとの共同プロジェクトとして国際理解講座を開講します。一日かけてインドネシアについて五感を使って学ぼうという欲張りな企画です。プログラムは、初級インドネシア語会話、インドネシア料理講座&昼食会、インドネシアの最新情報、ポチョポチョ・ダンス教室という内容です。

申込定員 50 名になり次第締め切ります。

第4期英会話教室は、ゴールデンウィーク明けに開講予定です。詳細はかわら版4月号に掲載します。

3 異文化理解講座 「未来を拓く子供たちへの贈りもの」

6月下旬で日程調整中

講師：文化庁文化部国語課日本語教育調査官

野山 広氏

外国人児童・生徒に対する日本語教育の状況と言語習得の問題から多文化主義的な言語教育政策を展開するスウェーデンとオーストラリアの事例をご紹介いただき、最後に日本の地域社会における多文化主義の展開について将来展望をまじえて伺います。

日本語教育関係者、小中学校の教員ならびに父兄の皆さま、国際交流団体の皆さまの参加をお待ちしております。詳細は5月号のかわら版に掲載します。

4 第4期「日本語の教え方講座」 受講生募集

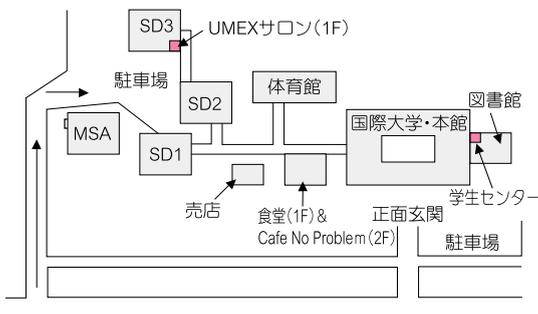
第4期「日本語の教え方講座」受講生を募集します。

夢っくす「初級日本語教室」は、本講座の第1期、第2期の修了者が担当しています。夢っくすでは、平成15年度に新たに日本語交流員15名の養成を課題にしており、第4期生を5月に募集します。応募者多数の場合は多言語部会で選考の上、決定します。

(株)アルクの通信講座「日本語の教え方・短期実践講座」(受講期間6ヶ月、受講料39,000円)を修了し、日本語交流員に登録して3ヶ月(週1回、1時間半程度)を1期とし、年2回以上レッスンを担当することを条件に受講料の一部29,000円を助成します。

入会案内

留学生交流を通じて地域の国際化や多文化共生社会へ向けた魅力ある地域づくりを目指すという夢っくすの目的に賛同される方の入会をお待ちしております。年会費 3,000 円。会員は日常的に活動に参加できるよう原則として魚沼地区に居住あるいは勤務されている方としております。入会は随時受け付けております。夢っくすに興味のある方は事務局までご連絡ください。



うおぬま国際交流協会

〒949-7277

新潟県南魚沼郡大和町大字穴地新田 777 番地

国際大学内 UMEX 事務室国際交流サロン(1F)

TEL: 025-779-1439/025-779-1520

FAX: 025-779-1180

http://umex.ne.jp/ E-mail:office@umex.ne.jp